

知的障がい者の高齢化が過去に例がないほど進んでいる状況下、現場の対応や支援についての主な課題として、次の3つを挙げられました。

- ① 生活習慣病の予防と健康管理
- ② 機能の低下と相応しい生活作り
- ③ 介護と医療的な支え

健康管理においては、健康な時の検査結果を残しておき、将来具合が悪くなった時のものと比べられるようにしておくことが大切になります。またのぞみの園では、医療だけでなく日常的に丁寧な客観的記録を残すことで、生活能力の変化や認知症を早期に認識し、本人の意思決定を支えながら状態に合わせて地域移行を含めた選択肢を提供することに役立てているとのことでした。

そして親なきあとでは無く、「親あるうちに」本人にとって「家族と一緒に過ごす楽しい嬉しい記憶の財産」をたくさん残すことをお願いしたいと話されました。

「良い経験がどれだけ出来たかで豊かな人格が形成され、笑顔を見られることが支援者の張り合いになっている。本人が望む場所で、望むかたちでの生活を過ごし、ターミナルケアを経て最後に『良い人生だったね』と送ってあげたい。」と結ばれました。重度知的障がい者の支援に携わる方にこのように思っただけなのは有り難いことと胸が熱くなりました。

午後はシンポジウムが行われ、秋田県手をつなぐ育成会会長の田中努氏、つながりラボ世田谷代表理事の堅山順子氏、金沢市障害者基幹相談支援センター相談支援員の寺西里恵氏が登壇、発表がありました。

「人生は楽しいと思える夕暮れ」を迎えるために経験値・選択肢を増やし、心ある支援者と出会う。そして自分らしく生きる。というお話が印象的で、豊かな高齢期を送るために今やれることを改めて考えさせられました。



【第2分科会／シンポジウム】

「第3分科会

障がい者理解・啓発と防災の課題について」

理事長 長谷川 美智代

第3分科会では、「障がい者理解・啓発と防災」～地域と共に暮らす～「まさかの時にも支え合えるつながりを深める」というテーマで、基調講演とシンポジウムが行われました。

最初に、一般社団法人スローコミュニケーション代表/植草学園大学 副学長 野澤和弘氏より、「知的・発達障害のある人の地域共生」と題し、地域と連携しながら福祉事業を展開されている社会福祉法人(北海道「ゆうゆう」・千葉県「恋する豚研究所」)や株式会社(群馬県「パーソルサンクス」・沖縄県「ユニバ石垣」)、NPO法人(愛媛県「はーと i n はーとなんぐん市場」)の紹介や千葉県浦安市を例に、都市の課題と都市での地域共生についてお話をされました。野沢氏ご自身も千葉県浦安市で社会福祉法人「千葉(ちらく)」を運営されており、障がいのある人が、高齢になっても入所施設に入らずに住み慣れた地域で暮らせるように事業を広げているとのことでした。また、野沢氏は60歳で毎日新聞社を辞められた理由を「新聞社も続けられなかったが、このままでは未来を変えられないと思った。自分がいなくなった後のことを考えると人材育成しかない。」と話されました。現在も講師・顧問をつとめておられる東大の「障害者に迫るリアルゼミ」では、障がい福祉に携わっている学生さんも多いそうなので、将来有望な人材を是非、育てていただきたいと思います。

続いて、跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授/ (一社)福祉防災コミュニティ協会代表理事 鍵屋一氏より、防災についてのお話がありました。まず、災害時に逃げ遅れないためには、「我々には、正常化の偏見(自分は大丈夫!という思い込み)があって、上手く備えたり逃げたりすることができない生き物なんだ。」ということを実感することが大事だと言われました。「正常化の偏見」とは、自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価してしまう人間の特性で、例えば非常ベルが鳴っていても「点検だろう」「大したことじゃない」と思い込んだり、災害で危険が迫る中「まだ大丈夫」「自分が被害に遭うはずがない」と考えてしまう人間の心理をいいます。災害時に働くこの心理を知っておくだけでも、「正常化の偏見」から抜け出し「被害に遭うかもしれない」と考え、非難行動がとれるのです。また、個別避難計画については、災害時に助かる確率を上げる計画として、その確率を上げ続